

自然と形成

——デモクリトスにおけるリズムの問題——

山下 尚一

本論文の目的は、古代ギリシア哲学者デモクリトスにおけるリズムの概念を検討し、リズムという語がどのような仕方で語られてきたのかについて明らかにすることにある。それによってリズムの語は、自然論のみならず倫理にかかわる射程の広い概念であるということが示されるだろう。

現在リズムという語は、音楽や詩やダンスの用語として知られており、一般に時間的な運動にかかわる原理とみなされている。だがその語源をたどってみると、現在とは異なった仕方でつかわれていた。リズムの語源は、古代ギリシア語のリュトモス(ῥυθμός, *rhythmos*)=リュスモス(ῥυσμός, *rhysmos*)である¹。このリュトモス=リュスモスという言葉は、音楽的な用語でもなかったし、流れや運動のこともなかった。それはむしろ、文字の線のかたち、着ている服のかたちを意味しており、さらには、人間の個人的な性格や気質といった倫理的な形式を意味していた。つまり、リズムの語は最初には、「かたち」や「形態」のことを指し示している。より厳密に言えば、固定して動かないものとしてのかたちや形態ではなく、時がたつにつれて変化しうようなかたちや形態をあらわすのである。

このリュトモス=リュスモスという語は、どのような仕方で使用されてきたのだろうか。そうしたリズム概念の歴史をたどるために、本論文は、古代ギリシア哲学の歴史に目を向ける。すなわち、古代原子論者であるデモクリトス(紀元前460頃～370頃)が書いたものを取り上げ、そこでリズムの概念がどのようにつかわれているのかということ进行分析する。

第一節では、デモクリトスの原子論的な自然学において、リズムという語が重要な概念であることを見ていく。第二節では、リズムの概念が、自然におけるひとつの全体的なかたちの形成にかかわるということを考える。第三節では、デモクリトスの用語であるリュスモスとスケーマという語を比較し、また第四節では、リュスモスとイデアという語を比較することによって、リズム概念のもつ形成という特徴

をくわしく論じる。第五節では、リズムの概念が、人間の魂の形成にもかかわるといふこと、それゆえに、自然の理論だけではなく倫理の問題にも積極的につながっていく広範な概念であるということをも主張する。

1. 原子の組み合わせによるかたち

リズムの語源である古代ギリシア語リュトモス＝リュスモスは、まずはかたちや形態という意味としてつかわれており、しかもそれは、すでに定まってしまったかたち、動かないかたちのことではなく、むしろ次の瞬間には別のものとなっているかもしれないようなかたち、動きうるかたちのことであつた。このリズムについて考察の手がかりを与えてくれるのは、古代ギリシアの哲学者たちであり、なかでも古代原子論者デモクリトスである。デモクリトスをはじめとする原子論者の著作は現存していないけれども、のちの時代の証言や引用に注目すると、リズムは原子論的自然学における重要な概念として浮かび上がってくる。

デモクリトスはレウキッポス（紀元前440～430頃活動）とともに原子論を展開した。原子論の考えはもちろん原子を想定しており、それら原子のはたらきから出発して自然のあり方をとらえようとする。ここでいわれている原子とは、現在私たちがつかっているような意味での物質の化学的単位ではなく、むしろ世界の仕組みを読み解くための哲学的概念である。より厳密には原子は、自然をとらえるための観念であるとともに、自然の存在の仕方そのものである。デモクリトスによると、原子という語は一方では、自然の(naturalis)事象がいかにして自然本性(natura)により支配されているのかという問いを考察するための鍵となるし²、他方では、自然(φύσις, physis)そのものとしていいかえられる³。

デモクリトスとレウキッポスの原子論によれば、すべての物質は、非常に小さな粒子、もはやそれ以上には分割できないような微小な粒子によって構成されており、その分割不可能なものが原子＝アトム(τὸ ἄτομον, to atomon)と呼ばれている。この原子は生まれることも死ぬこともなく、それ自体としてはまったく変化しないものである。そして原子は無数にあり、なめらかだったり凹凸が激しかったり、球状だったり角ばったりと⁴、それぞれ多様なかたちをもっているけれども、きわめて小さいので私たちの目に見えることはない。このいくつもある原子は何もない空虚な空間のなかを動いていて、ぶつかり合ったり、くっついたり離れたりしている。そうした原子間の衝突や集合や離散にしたがって、世界のあらゆる事物・事象が生まれる。このように、私たちには見えない最小の物質がさまざまな仕方と組み合わせ

られること、それがそのまま自然のあり方なのである。

そうした原子論にもとづく宇宙観は、それ以前の考えと比べると革命的な姿勢であったといわれている。一言でいえば原子論者は、意識や知性といった神的なものに依拠せずに、宇宙の合理性を語ろうとする⁵。たとえば、原子論以前に活躍したヘラクレイトス（紀元前540頃～480頃）やアナクサゴラス（紀元前500頃～428頃）はさまざまなところで神的なものにかんして言及しているし、同じくパルメニデス（紀元前540(515)頃～450以降）は時間を超越した思考について、またエンペドクレス（紀元前493頃～433頃）はあらゆる存在に共通する思考や知性について想定している。彼らによると、宇宙のシステムを可能にしているのは何よりもまず神であって、その神と結びつく意識や知性といった力こそが宇宙全体を支配する法則である。それに対してレウキッポスとデモクリトスは、こうした神的なものを考慮に入れることなしに、原子と空虚な空間だけによって宇宙のあり方を説明しようとする。たとえ意識や知性などの神的な力があるとしても、それが原子をコントロールするというわけではなくて、むしろ逆に、原子のさまざまな動きのほうが神的なものを生み出す。このとき宇宙は、「魂をもってもいないし神慮によって管轄されてもおらず、理性なき自然本性のままに、原子からつくり上げられている」⁶。最初にあるのは諸原子の自然的な衝突・集合・離散であって、その結果ようやく魂や知性があらわれてくる。それゆえ原子論にとって取り上げるべきなのは、微小な物質のあいだに起こっている結合と分離の仕方である。このように古代原子論とは、唯物論的な考え、そしてまた「機械論的あるいは機械論主義的な」⁷考えであり、それ自体としては生氣のない諸原子の運動によって、世界の現象を説明しようとする。

以上のような原子論的自然学において、リズムという語はどのような位置を占めているのだろうか。エミール・バンヴェニストによれば、リズムの語源であるリュスモス=リュトモスは、原子論の中心的な概念といえる⁸。なぜならデモクリトスは、リュスモスという語を含む著作をいくつか書いているからである。自然学の著作としては、原子にかんする『多様なリュスモスについて』と『リュスモス変換アメイプシリュスミア（ἀμειψιρυσμία, ameipsirhysmia）について』であり、音楽・文芸ムシケ（μουσική, mousike）の著作としては、『リュスモスとハルモニアーについて』である⁹。この「リュスモスは、〔デモクリトスの出身都市である〕アブデラ風のいい方で、形状スケーマ（σχῆμα, schema）の意である」¹⁰とされ、かたちや形態という意味で用いられている。

そこからわかるのは、リュスモスが原子のかたちや形態とかかわっているということである。先に見たように、原子それ自体はまったく変化しないとされるのだから

ら、原子のかたちが変わることもないはずである。しかし、『リュスモス変換について』という著作があることを考えると、リュスモスは変化するということになる。そうなるこのリュスモスは、原子そのものの形態というよりも、それら原子が集まったときにできる形態のことだろう。原子はほかの原子と自然に結合することでひとつのリュスモスを形成するけれども、しかしあるとき自然に分離してそのリュスモスを解体する。そののちに、ほかの原子と別の仕方でも自然に結合することでもうひとつのリュスモスを形成するようになる。このように、原子それ自体のかたちはつねに同じでありつづけるのに対して、諸原子が複合してでき上がった全体のかたちはそのつど変わっていく。「^ア「リュスモス^シを変換^スすること (ἀμειψιρυσμέω, ameipsirhysmeo)」

それはつまり、混合を変えること、あるいは変形すること」¹¹であり、そうした変更される形態のあり方がリュスモスと呼ばれているわけである。このように原子論におけるリズムは、あるひとつのかたち、より正確には、別のものになることもあるようなひとつのかたちのことを示す。以下では、デモクリトスにおけるリュスモス＝リュトモスの語の使用を考察しながら、リズムの具体的なかたちにせまっていこう。

2. 全体的なかたちの形成

まずアリストテレスの『形而上学』の一節を見てみよう。それによるとリズムは、アルファベットの文字のかたちとして考えられている。

基本要素＝文字(στοιχείον, stoiceion)のもつ差異は三種類あり、^{スキーマ}形状と配列(τάξις, taxis)と位置(θέσις, thesis)がそれである、と彼ら原子論者たちは主張している。彼らのいい方をすれば、「リュスモスとディアティゲー(διαθιγή, diathige)とトロペー(τροπή, trope)によって」のみ多様な差異は生ずるのであって、それらのうちリュスモスとは形状のこと、ディアティゲーは配列のこと、トロペーは位置のことである。すなわち、AとNの場合は形状による差異であり、ANとNAの場合は配列による差異であり、 \square 〔Zの古字体〕とHの場合は位置による差異である¹²。

\square とHについては、Hは \square が横になったものであり、両者は位置が異なっている。これはつまり、向き・構えのちがいとみなすことができよう。またANとNAについては、両者は配列が異なっている。これはすなわち、並び具合・順序のちがいと

考えられよう。そしてAとNについていえば、両者は形状が異なっている。どちらも山のかたちをなしている二本の直線は同じだが、残る一本の直線がちがった仕方でおかれており、その結果それぞれ異なる文字とされる。これはつまり、かたち・形態のちがいであって、さらにいうならば、空間的な配置のちがいである。リュスモスとは文字の位置でも文字の配列でもなく、文字をなす形状配置のことである。

ここで注目すべきは、リュスモスの差異が、ほかの二つのものと別のレベルではたらいっているということである。すなわち、ディアティゲーとトロペーが外在的な差異を示すのに対して、リュスモスは内在的な差異をあらわすのである¹³。まずΠとHのトロペーのちがいについては、一本の直線とその両端に垂直に描かれる二本の直線というかたちがすでにでき上がっており、それを外的に位置づけることによって、ΠあるいはHとなることができる。またANとNAのディアティゲーのちがいについては、AとNというかたちがすでにでき上がっており、それを外的に順序づけることによって、ANあるいはNAとなることができる。これらに対してAとNのリュスモスのちがいはというと、そこには確定した文字のかたちはまだでき上がっておらず、山のかたちの二本の直線をめぐって残る一本の直線が配置される仕方によって、AあるいはNとなることができる。それはつまり、文字の内部におけるちがいである。別のいい方をすれば、トロペーにおいてもディアティゲーにおいても、文字はすでにひとつの全体として与えられているけれども、リュスモスにおいては、文字はひとつの全体となりつつある。リュスモスとはこのように、文字がひとつの全体的なかたちであることを内側から支えているような組み合わせの仕方といえる。

この文字の形成という例は、諸原子の結合と分離ということにつながる。すなわち、文字のなかにある直線を原子とみなすことによって、諸原子による事物や事象のあらわれをメタファー的に説明できるということである。私たちが文字を読む場合、焦点となるのは直線そのものではなく、むしろいくつかの直線が編成されるやり方であり、それらが適切な仕方では結びつけられたときにのみ、私たちは文字を理解することができる。それと同様に、私たちが何かのものを感覚するとき、焦点となるのは原子そのものではなく、むしろいくつかの原子が組み合わせられるやり方であり、それらが適切な仕方では結合したときにのみ、私はそのものをとらえることができる。ある性質をもつのは原子それ自身ではなく、諸原子の集まりである。換言すれば、諸原子の集合としてのリュスモスをとらえることで、たとえばある特定の色が見えてくるだろうし、また、リュスモスが変わるのにつれて、たとえばある

特定の味が別のものに感じられるだろう¹⁴。こうしてリュスモスは、直線の結合や分離によって形成された文字のかたちであると同様に、原子の結合や分離によって形成された事物や現象のかたちなのである¹⁵。

原子の組み合わせによる事象の生成は、文字の形成として考えられるだけではなく、さらに語や文の形成としてもとらえられる。つまり、さまざまな形態をもつ原子から出発して、「すぐさま、ちょうど基本要素＝文字を用いるようにして、目に見えるもの、感覚されうる塊体が生み出され、結合がおこなわれる」¹⁶。原子は世界のことがらを成り立たせているエレメントであり、それはすなわち世界を構成している文字である。私たちがそこでものを感覚するということは、そうした文字の連なりを読み取るということにほかならない。文字にしても語や文にしても、視覚や味覚にしても、私たちは諸原子のまとまりを全体として把握するのである。そしてそのまとまりは、あるとき分解してはまた別の仕方でも結合するだろう。「諸原子から構成されたものがさまざまに変容して、同一のものが人によっては反対のものに思われるし、またわずかなものが混入しても変動が起こり、しかもひとつの変動が起こっただけで、全体として異なったあらわれを呈するという。なぜなら、同じ文字によって悲劇も喜劇も成り立っているからである」¹⁷。文字がつなぎ合わせられるやり方が少しでもちがうようであれば、文や文章はまったく別のものとして形成され、たとえば悲劇と喜劇のように対立するものとみなされるだろう。つけ加えるなら、色の組み合わせ方にしたがってまったく別の絵画があらわれるだろうし、音の組み合わせ方にしたがってまったく別の音楽があらわれるだろう。ここで重要なのは、作者がどのような劇や絵画や音楽を目指しているのかという意図の問題というよりも、文字や色や音がどのように物質的に配置されるのかという組み合わせの問題である。原子が組み合わせられるやり方によって、全体としての事物や事象はまったく別のものとして形成される。

そうした全体的なものの形成ということが、リュスモスの積極的意義といえる。リュスモスは「つねに「かたち」であり、さらにそれによって区別されるかたち、ある全体における諸部分の特徴的なアレンジを意味している」¹⁸。いくつかの原子をうまく整えて配置すること、これはすなわち、ひとつの全体的なかたちをもたらすこと、ひとつの全体的な図式をもたらすことである。ピエール・ソヴァネのいうように、リュスモスによって理解すべきなのは、「原子の落下、原子の偏向、要するに原子の運動といったものではなく、原子の輪郭、原子の構造、要するに原子の図式(*schéma*)といったものであって、さらに正確にいうならば、原子そのものの図式

というわけではなく、原子が組み合わせられたものの図式なのだ。このようにリズムとは、原子がつかの間結合したとき取るようなかたちである¹⁹。私たちが感覚するのは原子が一時的に取りうる形態であって、原子の運動それ自体ではない。リズムは流れるような運動としてではなく、ある期間におけるひとつの全体的な形状として考えられるだろう。

3. リュスモスとスケーマ

デモクリトスの原子論において、リュスモス＝リュトモスはかたち・形態を示す語であるが、興味深いことに、スケーマ(σχῆμα, schema)やアイデア(ιδέα, idea)といった単語も同じような意味をもっている。だがくわしく調べてみると、スケーマとアイデアが固定したかたちであるのに対して、リュスモスは動きうるかたちであることがわかる。

まずリュスモスとスケーマについて見てみよう。一般にスケーマは、「かたち」や「形状」や「姿」のことであり、さらには、「やり方」や「特徴」といった意味をもつ。また原子論における用法を思い起こせば、リュスモスはアブデラ風のいい方で形状^{スケーマ}の意であったし、アリストテレスによると、AとNにおける形状^{スケーマ}の差異はリュスモスの差異であった²⁰。またそこからソヴァネは、リュスモスを諸原子の複合物の図式とみなしていた。このようにリュスモスとスケーマの語はともに、かたちのこと、まさに原子からなるかたちのことをあらわしている。

しかし両者のかたちはそれぞれ異なったニュアンスをもっている。すなわち、リュスモスが動きうる形態であるのに対して、スケーマは固定した形態を指し示すのである。バンヴェニストによると、リュスモス(ῥυσμός, rhysmos)＝リュトモス(ῥυθμός, rhythmos)という単語における(ト)モス(-θ)μόςの部分²¹は、抽象的な語に与えられることで、その語の観念が目に見えてあらわれてきた個別的な様相を示す²¹。例えばオルケシス(ὄρχησις, orchesis)が、踊るという事実を意味するのに対して、オルケートモス(ὄρχηθμός, orchethmos)は、実際に踊りがおこなわれているその様子を意味する。それと同じように、レオー(ρέω, rheo)が、流れるという事態をあらわすのに対して、リュスモス＝リュトモスは、「流れるということの特定の仕方」をあらわすのであり、「動いているもの、動きうるもの、流動的なものによって引き受けられているあいだのかたち、組織の恒常性をもたないもののかたち」を示す²²。そこで考えられているのは、ある局面において見られたものの様子、そして次の局面ではちがったふうに見えることもあるような様子のことである。他方

でスケーマという語は、ギリシア語のエコー(ἠχώ, echo), ラテン語のハベオー(habeo), つまりは「私をもつ」ということと関連している言葉であって、私によってしっかりとつかみ取られたかたち, つねに私の手もとにあるかたち, 要するに, 「固定し, 実現され, いわばある対象のようにおかれた, そうした「かたち」として定義される²³。そこで想定されているのは, 動くことのないような対象, そしてどの局面で見ても同一のものとして考えられるような安定した対象である。

ちがいをさらに際立たせるならば, スケーマがかたち(forme, Gestalt)であるのに対して, リュスモスはかたちづくること(formation, Gestaltung)であるといえよう²⁴。あるいは, スケーマが静止した状態のものであるとすれば, リュスモスは動きつつある状態のものである。原子論的自然学との関連からいうと, スケーマは原子それ自体としての変わらない形状であるけれども²⁵, リュスモスは原子同士が結び合わされたものとしての変動的な形状である。原子は寄り集まりながらあるかたちを形成し, また別のかたちへと変形していくのであって, ときに水や火としてあらわれ, またときに植物や人間としてあらわれる²⁶。

たとえば, 風があらわれる仕方について考えてみよう。デモクリトスによると, 風が起きるのは, 狭い空虚な空間に多くの物体が集まってぶつかり合ったあとに, それらの接触がなくなってひとつの流れが生じるときである。それはまるで, 狭い街なかのおり道に多くの人々が集まってぶつかり合ったあとに, 人々の接触がなくなってひとつの流れが生じると同様である²⁷。この風という現象は, 諸々の原子が結びついたあとにできる様態であるという意味で, たしかにひとつのかたちといえるだろう。しかしより正確に言えば, それらの原子は結びつきうるだけではなくほどこかれうるのであって, そうした集合と離散のあり方そのものが風という事象なのである。さらに, その風をなしていたはずの原子は, 別の仕方でも結びついて, 火や水という別の事象になったり, ときには植物や人間という事物にもなったりするだろう。こうして風は, その当の局面においては感覚されうる特定の様子ではあるが, それがずっとつづくことはなく, 別の局面ではもはや感覚されえない様子である。それはつまり, かたちというよりもかたちづくること, スケーマというよりもリュスモスであって, いわば動きをはらんだかたちなのである。

4. リュスモスとアイデア

次に, リュスモスとアイデアについて見てみよう。アイデアという語は, 「見る」という意味をもつ動詞エイドー(εἶδω, eido)から派生した名詞で, 「見られたもの」のこ

と、「かたち」や「姿」のことである。先に挙げたデモクリトスの著作、原子にかんする『多様なリュスモスについて』は、ある箇所では、原子にかんする『形態について』^{イデア}といいかえられており²⁸、また原子論におけるイデアの意義は、「類似性(ὁμοιότης, homoiotes)、形姿(μορφή, morphe)、形相(eἶδος, eidos)。または最小の物体」²⁹と定められている。のちにプラトンが提唱するのとは異なって、このイデアは、「もっとも物質的な意味におけるかたち」³⁰のことであり、物質性のない純粋な理念とみなすことはできない。ここからイデアとリュスモスは、どちらも原子論的自然学の根幹をなす概念であり、物体のもつ形態や形状をあらわす同義語であることが推定されるだろう。

しかし両者の用いられ方を見ていくと、まったく同じというわけにはいかない。一方でイデアの概念は、原子＝アトム³¹の語と結びつくことによってアトモス・イデアという表現となり、この言葉は、原子の「不可分な形状、つまり永遠不変の究極的な形態」を意味する³¹。そのときイデアは、原子そのもののかたちをいいあらわしている。他方でリュスモスの概念は、『リュスモス変換について』という著作のタイトルがあったように、または、直線の結びつき方によって異なったリュスモスの文字が生まれたように、変換や変化と関連している。このときリュスモスは、原子それ自体のかたちというよりも、複数の原子が寄り集まってできるもののかたちをいいあらわしている。イデアとリュスモスはどちらも原子論の原理となる概念であり、たしかに同様の広がりをもつけれども、とはいえそれらの適用のされ方からすると等価とはいえないように思われる。両者のちがいを強調するなら、イデアは原子そのものとしてのずっと変わらない形状であるのに対して、リュスモスは原子の組み合わせにしたがって変わりうる形状である。

イデア的なかたちとしての原子は結びつき合ってリュスモス的なかたちとなるけれども、そこにはひとつの法則がある。イデアはまず「類似性」と定義されていたように、原子と原子はそれぞれの姿が似ているときに結合する。そこにあるのは、似たものが似たものを認識しようという古くからある考えであり、たとえば鳩は鳩と、鶴は鶴と群れるように同じ動物同士が集まるし、ふるいによって豆は豆と、大麦は大麦と分けられるように同じ事物同士が配列される³²。すなわち「相似たものは相似たものによって動かされ、類縁的なもの同士はおたがいに向かって運動するのであり、またさまざまな形状をしたもののそれぞれが、異なった結合状態におかれると別の様態のものになる」³³。諸々の原子はでたらめに動くのではなく、類似性を基準にして動くということである。

ここにおいて、リズム概念の根本的特徴がはっきりしてくる。リュスモスは、一方でつねにかたちを変えて揺れ動いているけれども、他方で確固たる基準にしたがってひとつにまとまっている。そうした可動性と必然性の両立、要するに、ある期間のあいだだけ特定のかたちを保つということがリズムなのである。

実在同士が一定のあいだ「まとまりを保っている」ことの原因として、デモクリトスは、物体の相互適合と相互把捉とを挙げている。なぜなら、それらのあるものは凹凸が激しく、あるものはかぎ型をしており、またくぼみをもったものや突起のあるものもあり、そのほか無数のちがいをもっているからである。そのために、一定時期まではそれら自身をしっかりとつかまえ合って「まとまりを保っている」のだが、やがてそれらを取り囲むものによって、何らかのより大きな必然性が立ちあらわれ、それらを激しく揺さぶり、四散させることになる³⁴。

原子はいつでも集合や離散のさなかにあるとはいえ、それは偶然的な運動ではなく必然的な運動である。いやむしろ、原子は偶然のままに動いており、だがそのことと矛盾することなく、原子は必然にしたがって動いているのである³⁵。デモクリトスによって提出されたこうした自然論は、のちにいくつかの反駁を招くことになるだろう。すなわちプラトンは、知性や神の力を探究せずに、自然の出来事を偶然によって説明するというデモクリトスの姿勢を批判しているし³⁶、アリストテレスは、目的因を探究せずに、自然のことがらを必然に帰しているというデモクリトスの態度を批判している³⁷。デモクリトスはまさに、自然を自然本性的に考えようとしている。そこには原子のリズミカルで自然本性的な動きがあるのみであって、それを動かしている何らかの力もなければ何らかの理由もない。とらえるべきなのは、「ある不定の時間内に不可分なものが集合状態にあること」³⁸なのである。原子のリュスモスは、動きがあるとはいえ必然的な法則をもつし、法則をもつとはいえきまったかたちであるわけではない。

そのように、ある不定のあいだだけ集合して形態を取るという事態については、ミシェル・セールも注目している。セールはとくに、不可逆的な流れのなかにふと生じる可逆的なかたちを取り上げて、一時的な形態としてのリズムを論じる。たとえば、音楽のはじめから終わりへと向かう流れはたしかに一方向的であるけれども、そこかしこに音という周期現象が生じ、拍子や対位法という回帰の現象が起こる。また、川の上流から下流へと向かう流れはたしかに一方向的であるけれども、そこ

かしこに渦や乱流という回帰の現象が見られる。こうした経験というのは、「レイン [=流れ] のなかにリュトモスを、あるいは流れのなかに渦を、あるいは不可逆的なもののなかに可逆的なものを眺めさせてくれる。リズムとはひとつのかたちである。そう、それは最初のディノス [=渦] のなかで結合した諸原子によって取られたかたちなのである」³⁹。ここには、いくつもの原子が相互に結びつき、少しのあいだだけまとまりを保つということが明瞭に示されている。もちろんそのまとまりはずっと存続するのではなく、いつの間にかちりぢりになり、自然と過ぎ去ってしまうだろう。

このように不可逆的な流れのなかにあり、「とはいえしばらくのあいだそのかたちを保存する過程」とは、いったいどのようなものだろうか。セールの興味深い議論にしたがえば、その過程とは「生命そのもの」であり、「私の身体」である⁴⁰。生命ある私の身体は、もちろんひとつのかたちであって、しかも不可避免的に死へと差し向けられているひとつのかたちである。だがつねに死へと向かいつつも、しばしのあいだそのかたちをとどめておくことができる。私は死の瞬間にいたるまで、あるときは食事をしたり眠ったり、あるときはほかの人と話したりひとりで歩いたり、さまざまな活動をとおして私の身体の形態を保ちつづける。私は私の身体を一時のあいだ維持しているわけであり、この過程こそ、生命そのものといえるだろう。そのように私の身体は、諸原子が必然性をもってまとまり、ある期間のあいだだけ保存されるような可動的な形態であって、いいかえればまさしく、リュスモス=リュトモスとしてのかたちなのである。

リュスモスとアイデアのちがいについて考えるために、もうひとつ別の視点からより具体的なかたちを取り上げてみよう。たとえば松についていえば、松にもさまざまなかたちのものがある。しかしそれらすべては同じひとつの松といえるはずである。ところがこの同じひとつの松のかたちというのは、もはや外形としてのかたちではなく、「松の存在の内的な「かたち」」⁴¹である。私たちはこれをアイデア的なかたちといえることができる。この内的なかたち、あるいはこの内的なきまりとしてのアイデアは、かたちであるとはいえ目によって見ることはできず、理性によってつかまれるものだろう。アイデアは固定したかたち、しかし見える外形そのものというわけではなく、その外形をそれとして定めているような内的なかたちなのである。他方で、たとえば能舞台上に描かれる場合、松はたしかに外形としての目に見えるかたちではあるけれども、それと同時に、松の内的なかたちを担うものとしてとらえられる。これはつまり、外形のさまざまなあらわれを代表するような松、「典型」と

しての松」⁴²である。この松は、ほかに目にする松の外形と異なるかもしれないが、ほかのものと同じであるための必然的な法則をそなえている。私たちはこれをリュスモス的なかたちとみなすことができるだろう。この典型的なかたちとしてのリュスモスは、内的なかたちを示唆しうる外的なかたちなのである。こうしてリュスモスは、アイデアとは異なりつつも、アイデアをあらわすことができる。一方でアイデアが、外形を支えている形態、それ自体は変化しない内的な形態であるとするれば、他方でリュスモスは、そのアイデアにのっとっている形態、しかし変化しうる外的な形態である。

以上において、スケーマとアイデアの概念と比較しながらリュスモスという語を精査してきた。スケーマが固定したかたちを示すのに対して、リュスモスは動きをもったかたち、さらには、かたちづくりのプロセスを意味する。また、アイデアが内的なかたちを指すのに対して、リュスモスは外的なかたち、しかも典型としてのかたちを意味する。それゆえリュスモスは動くけれども、不規則に揺れ動いているのではなく、ある必然性をもって動いている。それはまるで生命ある身体のように、ある不定の期間だけ成立するようなかたちといえる。

5. 人間の形成と自然本性

これまで見てきたように、リュスモス＝リュトモスは諸原子が自然的に組み合わせられることでできたかたちであり、それはたとえば文字や語、視覚や味覚、そして火や水や風といったように、私たちのまわりにあるすべての現象を形成している。しかしさらに重要なことに、リュスモスは私たちの魂を形成し、私たち自身を形成する。いいかえれば、リュスモスという言葉は原子論的自然学の中心的概念であるとともに、倫理の思想にも積極的にかかわる観念なのである⁴³。

アリストテレスの説明によれば、リュスモスのかたちは魂としてあらわれる。デモクリトスやレウキッポスは、「原子のうちで球状をしたものが魂であるとしているが、それはこのような「^{リュスモス}かたち」のものがもっともうまくすべてのものをとおってすり抜け、自分自身が動きつつそのほかのものを動かすことができるという考えからである」⁴⁴。魂が原子を動かすのではなく、原子が結合して魂のかたちを取る。もちろんでき上がった魂の形態は、どれも同じというわけではなく、原子の組み合わせにしたがってさまざまであろう。私たちはここにおいて、魂のかたち、魂の形態としてのリュスモスを見出すことができる。

そこからリュスモスという語は、人間形成の問題にかんして使用される。たとえ

ばデモクリトスは、リュスモスからできた動詞リュスモー(ῥυσμός, rhysmo)という語を用いて、以下のように述べている。「無思慮な人たちは偶運の利益によってかたちづくられるけれども、そうしたことを知っている人たちは知恵の利益によってかたちづくられる」⁴⁵。人間はそれぞれ異なったやり方で形成されるのであって、たとえば確実な知識によって魂が育つ場合もあれば、不確実な偶然にしたがって魂が育つ場合もある。このようにリュスモーという語をとおして、魂がかたちづくられていく様子、ある人がまさにその人としてかたちづくられていく様子が語られている。

さらにリュスモスは、教育や倫理の問題について用いられる。デモクリトスはあるところで、リュスモスからできた別の動詞であるメタリュスモー(μεταρυσμός, metarhysmo)という語を用いながら、人間と教育と自然のあいだの関係をとらえようとする。「自然本性(φύσις, physis)と教育(διδασχία, didache)は似ている。というのまたしかに、教育は人間を変容させるけれども、この変容によって、自然本性を生み出すからである」⁴⁶。教育が人間をメタリュスモーするということは、教育が人間のリュスモスを変える、人間のかたち・形態・姿を変えるということである。それはつまり、人間のリズムを変えるということである。私たちは教育を受けることによって、自分の考えが浅かったことに気づき、それまでの自分の考えをあらためたり、自分でも気づかないうちに言動や気持ちが変わったりする。あるいはまた、自分の考えがやはり正しかったということを確認し、より確固とした言動や気持ちにつながっていく。いずれにしても私たちは、以前とはちがったかたちで考え、ちがったかたちで行動するようになっていく。こうして「ちがったかたち」になっていくこと、このことをデモクリトスは、メタリュスモーという用語であらわそうとする。教育とは、私たちの魂の形式を更新していくということであり、魂のリュスモスを変えていくということである。

ここで注目すべきなのは、自然本性という言葉である。この自然本性という語は、私たちのまわりにある「自然」や「環境」という意味だけではなく、ある人やある事物に本来的にそなわっている「性質」や「本性」という意味をもっている。それに対立するのはノモス(νόμος, nomos)という語であり、この言葉は、何度も実践されたり使用されたりすることによってえられたもの、すなわち「慣習」や「法律」という意味をもっている。先の断片でデモクリトスは、教育と自然本性のつながりを強調しているけれども、別の箇所では法律を批判している。彼によれば、徳に向けての教師としては、はげましと言論による説得を用いる人のほうが、法律と強制

を用いる人よりもすぐれているし、さらに法律とは悪しき考案品であるから、知者は法律に服従してはならず自由に生きるべきである⁴⁷。

デモクリトスが教育に求めるのは、法律的なやり方ではなく、自然本性ののっとった仕方である。法律がおこなうのは、すでに定められた考え方を強制しながら私たちを導くことである。すなわち法律は私たちを外側から取り囲み、それによって、私たちの考え方は定まったかたちにかたどられるだろう。それに対して、自然本性にしたがう場合、教育が強制するということはない。このとき教育は、私たちが自分の本性にしたがって自分の考えを動かすようにうながし、これによって、私たちは自分の考え方を変えたり、もとのまま延長したりして、そのかたちを自由に變形させるだろう。私たちの考えや行動は、法律にしたがうときまったく安定した形式になるし、自然本性にしたがうときいくらか不安定な形式になる。

デモクリトスにおいて、こうした自然本性とリズムは密接に関連している。ソヴァネによれば、そこには人間の形成という事態が見えてくる。「自然本性は事物のかたちを変え、事物に事物の自然本性を与えるが、同じように、教育は人間のかたちを変え、人間に人間の自然本性を与える。人間の自然本性というのは、人間の「形成」としての「リズム」とおっていかなければならないものなのだ。このようにしてかたちを変えられた人間、このように「リズムづけられた」人間だけが、十分に人間である。教育により与えられる「リズム」とは、自然本性と人間の自然本性とを媒介するものである」⁴⁸。人間を形成すること、人間をかたちづくることは、人間のかたちを変えること、人間のリュスモスを変えることであって、それこそが自然本性にしたがった教育である。

ここで興味深いのは、変容と形成が同時におこなわれるということである。私は教育を受ける以前からすでにある特徴や性格をもっているが、たしかに教育によって、その特徴や性格が変化するかもしれない。とはいいいながらも、私そのものが変化するということはありえない。教育が私にどれほど影響を与えようとも、私を私でないものにすることはできない。私はその教育によって考えのかたちを変えていくとしても、私はそのことをとおしてむしろ私自身をかたちづかっていく。教育は、私をいわば新しい私へと変えるということ、より私自身となった私へと変えるということである。それはつまり、私を変えるというよりも、私をより本性的な私にし、より自然的な私にするということである。このように、私の魂の形式はたんに変容するだけではなく、より私自身に見合ったかたちへと変容する⁴⁹。私に変容しながらも私自身として形成されていくこと、このはたらきのことを私たちは、人間形成

のリズムと呼べるだろうし、さらには人間形成の自然的—倫理的なリズムと名づけることもできるだろう。

そうした人間のリズムは、もちろん不都合なくなめらかに進むということはなく、つねにそれをはばむ試練とともにある。私たちの自然本性は一度かぎりで固定されるわけではなくて、試練によってそのつど変形させられる⁵⁰。デモクリトスはこの試練(ἄσκησις, askesis)の倫理的な価値を強調することで、教育によって第二の自然本性が獲得されるというふうと考えている⁵¹。私たちの魂は、ずっと同じあり方で生きていくことはできず、ある困難に立ち会ったときにはそれに対応するべく、努力してみずからのあり方を変えていかねばならない。それはまるで、諸原子がみずからの組み合わせを自然に変えていくかのようである。魂は、永遠不変なかたちではまったくなく、むしろ一時的で変更可能なかたち、状況に応じて別のものとなっていくようなかたちなのである。この試練をくぐり抜ける魂の形成ということ、そのことをリズムの概念はあらわしているといえよう。

6. 結論

以上において本論文では、デモクリトスの原子論においてリズムという語がどのようにつかわれたのかということ考察してきた。リズムの語は原子論的自然学における中心的な概念であり、諸原子が自然に組み合わせられることで形成されたかたちや形態のことを指している。リズムはとりわけ、ある文字のかたちとして理解されるが、ほかの諸感官によってとらえる事物・現象としても理解される。とはいえこのかたちは、スキーマのように確固とした形態ではないし、イデアのように内的なきまりとしての形態でもない。リズム的なかたちとされるのは、動きつつある形態、しかも必然性をもって動きつつある形態である。さらにリズムの語は、物質のかたち・形態だけではなく魂のかたち・形態をも意味しており、教育が人間を自然本性的に形成していくそのやり方を指し示している。このようにリズムは、自然論だけではなく倫理の問題にもかかわる幅広い概念なのである⁵²。

これまで見てきた原子の組み合わせ、文字の形成、人間の形成といったものは、いわば安定と不安定のあいだ、そして固定と運動のあいだに位置している。そのリズムのあり方を積極的にとらえるために、私たちは最後に、カイロス(καιρός, kairos)というデモクリトスの用語を挙げておきたい⁵³。カイロスとは、「適宜」や「適度」といった意味であり、求められる度合いに見合った望ましい様子、時宜にかなったふさわしい様相、場所に応じたちょうどよいあり方を示す。先に述べたように、

原子の組み合わせは、一度できたらもはや変わらないというのではないし、とらえられないほどに変わりつづけているというのでもなく、あるとき解体しては、またあるとき別の仕方では結合する。同じように私たち人間の感情は、生まれてからずっと怒りつづけているというのではないし、何秒かごとに喜怒哀楽の変化が起こるというのでもなく、あるとき怒りがおさまっては、またあるとき悲しみにうもれてしまう。しかしながら「あるとき」とはいつでも、いつでもよいというわけではけっしてなく、必然的に時宜にかなっているまさしくそのときでなければならない。そのときにこそ、リュスモス=リュトモスは移り変わるのであって、アルファベットのAはNとなり、ある特定の味覚は別の味覚となり、教育をとおして私は新たな私となる。そのようにカイロスをそなえていること、そのつどふさわしいときにみずからのかたちを更新していくこと、これこそがリズムといえるのだろう。

注

¹ Émile Benveniste, « La notion de « rythme » dans son expression linguistique », *Problèmes de linguistique générale*, tome 1, Paris, Gallimard, 1966, pp. 327-335. Pierre Sauvanet, *Le rythme grec*, Paris, Presses Universitaires de France, 1999. リュトモスとリュスモスは同じ言葉であり、イオニア地方ではリュスモスという語がつかわれていた。

² Demokritos, 68B14, in Hermann Diels, herausgegeben von Walther Kranz, *Die Fragmente der Vorsokratiker*, Band 2, Dublin, Weidmann, 1954, 6. Aufl., p. 142. 邦訳内山勝利編、『ソクラテス以前哲学者断片集(四)』、内山勝利ほか訳、東京、岩波書店、1998年、160頁。以下で同書を引用する場合は、略号をDKとし、断片箇所(原書頁/邦訳書頁)を記す。なお、以下の引用にさいして邦訳があるものは参照させていただいたけれども、変更をくわえた場合がある。

³ *Ibid.*, 68B168 (178/206).

⁴ Leukippos, DK, 67A11 (74/12).

⁵ 邦訳エドワード・ハッセイ、『プレソクラティクス』、日下部吉信訳、東京、法政大学出版局、2010年、203-204頁。ここで神的なものという言葉は、非宗教的な意味でつかわれている。邦訳ジョン・パーネット、『初期ギリシア哲学』、西川亮訳、東京、以文社、1975年、33-34頁を参照。

⁶ Leukippos, DK, 67A22 (76-77/17).

⁷ Paul Foulquié, avec la collaboration de Raymond Saint-Jean, *Dictionnaire de la langue philosophique* (1962), Paris, Presses Universitaires de France, 1969, p. 55.

⁸ Benveniste, *op. cit.*, p. 328.

⁹ Demokritos, DK, 68A33 (91/46-47). この音楽・文芸のリュスモス概念については、残念ながら手がかりが見つかっていない。のちにキケロは、ギリシア語リュトモスが尺度(mensura)にかなうものを示しており、ラテン語ではヌメルス

(numerus)と呼ばれているということを報告している。*Ibid.*, 68A34 (92/49)を参照。ここに見られる尺度としてのリズムという考えはプラトンに由来し、そこから出発したリュトモスと数(ヌメルス)という語の密接な関係はアウグスティヌスへとつながっていく。

¹⁰ Leukippos, DK, 67A6 (72/7).

¹¹ Demokritos, DK, 68B139 (169/195).

¹² Leukippos, DK, 67A6 (72/6-7) (=Aristoteles, *Metaphysica*, 985b13). 邦訳アリストテレス、『形而上学(上)』、出隆訳、東京、岩波文庫、1959年、39-40頁。出隆氏はリュスモスを「恰好」と訳している。

¹³ Sauvanet, *op. cit.*, p. 42. あるいは、リュスモスはもともと本質的な原因であるといえる。西川亮、『デモクリトス研究』、東京、理想社、1971年、130頁。

¹⁴ Demokritos, DK, 68A125 (112/99), 68A132 (114/103).

¹⁵ ハンス・ブルーメンベルクのいうように、文字のメタファーは原子論の方法を具体的に説明するけれども、その基礎づけにまでかかわるものではない。とはいえ、原子論が文字のかたちや形態として表象されなければならなかったということについては、やはり目を向けておくべきだろう。邦訳ハンス・ブルーメンベルク、『世界の読解可能性』、山本尤、伊藤秀一訳、東京、法政大学出版局、2005年、37-38、34頁。

¹⁶ Demokritos, DK, 68A37 (93/52).

¹⁷ Leukippos, DK, 67A9 (74/11).

¹⁸ Benveniste, *op. cit.*, p. 330.

¹⁹ Sauvanet, *op. cit.*, pp. 43-44.

²⁰ リュスモス=リュトモスをスケーマといいかえている証言としては、Demokritos, DK, 68A38 (94/53), 68A125 (112/99)などを参照。さらに、Sauvanet, *op. cit.*, p. 97を参照。

²¹ Benveniste, *op. cit.*, p. 332.

²² *Ibid.*, p. 333.

²³ *Ibid.*, p. 333.

²⁴ Sauvanet, *op. cit.*, p. 47.

²⁵ ひとつひとつの原子は、角ばったり丸かったり、大きかったり小さかったりという形状スケーマをしている。Demokritos, DK, 68A135 (118/112-113).

²⁶ *Ibid.*, 68A57 (98/65).

²⁷ *Ibid.*, 68A93a (106/84).

²⁸ *Ibid.*, 68B5i (138/154).

²⁹ *Ibid.*, 68B141 (170/195). デモクリトスはアイデアを原理としたといわれている。*Ibid.*, 68A57 (98/65).

³⁰ Jean Salem, *Démocrate*, Paris, Vrin, 1996, p. 39.

³¹ 西川、前掲、74頁。アトモス・アイデアは、Demokritos, DK, 68A57 (99/65)において、アトムス・アイデアス(ἀτόμους ιδέας, atomous ideas)という表現として出てくる。その解釈については、Vittorio Enzo Alfieri, *Atomos idea*, Firenze, Felice le Monnier, 1953を参照。

³² Demokritos, DK, 68B164 (176-177/204).

³³ *Ibid.*, 68A38 (94/53).

- ³⁴ *Ibid.*, 68A37 (93/52).
- ³⁵ Salem, *op. cit.*, p. 77. ギリシアにおける必然と偶然という観念が対立していないということについては、*Ibid.*, p. 79, n. 1を参照。
- ³⁶ Plato, *Leges*, 889b-c. *Platonis Opera*, tomus 5, recognovit brevique adnotatione critica instruxit Ioannes Burnet, Oxonii, E Typographeo Clarendoniano, 1907, pp. 333-334. 邦訳プラトン、『法律(下)』、森進一ほか訳、東京、岩波文庫、1993年、256-257頁。
- ³⁷ Demokritos, DK, 68A66 (101/70) (=Aristoteles, *De generatione animalium*, 789b2). 邦訳アリストテレス、『動物発生論』、島崎三郎訳、『アリストテレス全集(九)』、東京、岩波書店、1969年、314頁。
- ³⁸ 西川、前掲、117頁。さらに、180頁も参照。
- ³⁹ Michel Serres, *La naissance de la physique dans le texte de Lucrèce*, Paris, Minuit, 1977, p. 190. 邦訳ミッシェル・セール、『ルクレティウスのテキストにおける物理学の誕生』、豊田彰訳、東京、法政大学出版局、1996年、238頁。
- ⁴⁰ *Ibid.*, p. 191. 邦訳239頁。
- ⁴¹ 加藤信朗、『ギリシア哲学史』、東京、東京大学出版会、1996年、17頁。
- ⁴² 前掲、18頁。こうした典型化をなすはたらきを構想力と呼べるし、それこそが芸術家のもつ能力であろう。
- ⁴³ 西川、前掲、303-306頁を参照。
- ⁴⁴ Leukippos, DK, 67A28 (78/20) (=Aristoteles, *De anima*, 404a5). 邦訳アリストテレス、『心とは何か』、桑子敏雄訳、東京、講談社学術文庫、1999年、22頁。
- ⁴⁵ Demokritos, DK, 68B197 (186/212-213).
- ⁴⁶ *Ibid.*, 68B33 (153/177).
- ⁴⁷ *Ibid.*, 68B181 (181/209), 68A166 (129/138).
- ⁴⁸ Sauvagnet, *op. cit.*, p. 48.
- ⁴⁹ そうした教育における変容かつ形成というはたらきは、特殊な技術を教える場面についてもあてはまるだろう。たとえば、私が絵を描く技術を学ぶとき、その教育によって私の描き方は、それまでとは根本的に変化するかもしれない。とはいいいながらも、私の描いたものが私の絵画でなくなってしまうということはありえない。私は教育をとおして、むしろ私の絵画を新たなやり方にかたちづくっていく。絵を描くための技術の教育は、私の絵画を変えるというよりも、私の絵画をより私の本性にかなったものとし、より私の自然にかなったものとするのである。このように、私の絵画の形式はたんに変容するだけではなく、より私自身に見合った絵画のかたちへと変容する。
- ⁵⁰ 西川、前掲、258頁。
- ⁵¹ Salem, *ibid.*, p. 342. 習慣により獲得されたものが、生来の自然本性与同じ効果を生むという考えは、アリストテレス、キケロ、アウグスティヌスらに継承されていく。*Ibid.*, pp. 343-344.
- ⁵² デモクリトスはさらに、公共的なものを論じるときにもリュトモス=リュスモスの語を使用しており、当時の政治的なかたち・形態・制度という意味で用いている。「現に定まった秩序形態においては、支配者たちに対して不当な仕打ちをしないためのいかなる工夫もなく、たとえ彼らがきわめて優秀であるとしてもないのだ」(Demokritos, DK, 68B266 (200/227))。こうした用法を見ると、リズムという言葉

葉が非常に広く適用されていたことがわかる。

⁵³ *Ibid.*, 68B71 (159/183), 68B94 (162/185), 68B226 (190/218)などを参照。